

耕——文化を問い直す

生活文化の基盤であった

「都市」に埋め込まれた価値を取り戻し、

再起動へつなげる連続特集企画「ルネッセ (Renesse)」。

3回目となる今号の対談では、

スーパー・アドバイザーの松岡正剛氏とともに、

都市・地域における文化のあり方をテーマに語り合う。

橋本裕貴 | 撮影

対談

〔株編集工学研究所所長〕

松岡正剛

Matsuoka Seigow

池永寛明

Ikenaga Hiroaki

〔大阪ガス(株)エネルギー文化研究所所長〕



地域文化を持ったまちをつくるには

池永 116号の「場」、117号の「交」と続けてきた「ルネッセ」(再起動「Rensse」)するための方法論を考えていく対談ですが、今回はルネッセの中核である「耕(文化を問い直す)」にスポットを当てたいと思います。そもそも私どもの研究所の名称には「文化」がついています。が、「文化とは何か」というのが、実は大きな疑問とするところで、そこをじっくり掘り起こしていければと考えています。

まず「地域の文化」からお話しさせていただくと、私が思い当たるのは「出汁」です。日本料理は出汁から始まりますが、今は調味料を使い、本来の料理の工程を省いてつくってしまいます。そもそも出汁とは、その地域でしか収穫できない食材を利用し、時間・手をかけて地域独自の味をつくり上げてきたものですが、その地域性が喪失され全国一律になってしまっていると思います。

東北に何度かうかがう機会があり、宮城県名取市の閑上地区について、副市長さんとディスカッションさせていただき、「人口を増やすこと、減らすことをくい止めることが、まちの存在理由ではない。最終的に残るまちは、地域文化を持ったまちではないか」とお聞きしました。かつて確実にあった地域文化を、どのようにその場に注入して再起動できるかが課題だ、と。復興にあたって、国の都市計画的な枠組みだけでは限界があり、「文化」の重要性を感じられています。そこで住民の方々が話し合って、新たなまちの中心に神社を据えられました。

松岡 私も閑上に行ったことがあります。震災で

も、どうにかもつだろうと私は思っているんですが、それは人とクラブとサロンといった地域経済文化の基層があるからです。たとえばワインはブドウの木まで、チーズは牛やヤギ、それからうじ虫まで大事にしていく。カルロ・ギンズブルグの『チーズとうじ虫』という有名な世界的ベストセラーがあるくらいですから。大阪は、なぜかそれがバラバラになってしまった。寂しいことですね。

文化の種・土壌・育成と目利き

池永 大阪が失った最大のものは、文化ではないかと思っています。その「文化」という言葉自体も、本来の意味が誤解されているように感じます。文化イコール美術、芸術、芸能というふう捉えられがちですが、それも曖昧です。

たとえば陶芸品。樂焼という陶器そのものは文化ではなくて、むしろ繰り返すこと、樂焼という芸術品をつくり続けることが文化の本質ではないかと思っています。樂焼は、初代から16代までそれぞれが先人のワザを伝承しながらも新しいものを加えてつくり続けています。文化の本質は「繰り返す」ことではないでしょうか。

それは浄瑠璃も歌舞伎も一緒で、芸術文化に留めるのではなく、都市文化や地域文化、さらに生活文化、産業文化、企業文化も同様で、それぞれの本質をどう永続的につなげられるのが最も大切ではないかと考えています。

今号のテーマは「耕」ですが、「カルチャー」という英語はそもそもラテン語の「耕作し、栽培する」が語源です。土地を耕して、種を蒔き、水と養分を与え、雑草・害虫を駆除して、収穫する種を取り出してまた植えるというプロセスを繰り返す

何もかもなくなっていました。神社から始められることにしたのです。よくぞやりました。

池永 地域に根差した産業をどうつくりうるのか、それが文化になるとはどういうことか、という点では気仙沼の例が示唆的です。気仙沼は震災があったにも拘わらず、生鮮カツオの水揚げ量は20年連続日本一を守られました。船が入港したら気仙沼の産業が一気に動き出すという、漁業と水産と商業のビジネスフローが再構築されたことが、まちを復活させる重要なポイントになっています。

一方で、「高原の原宿」と言われた山梨県の清里は、今はすっかり変わってしまった。やはり地域の産業がない、必然性のある地域文化がないところは、ブームにはなりえても維持できないのではないかと思います。

松岡 清里とは違うと思いますが、関西にも「つかしん」など、かつて一挙に人気を集めながら駄目になっていったスポットが多いですよね？

池永 やはり地域ならではの「必然性」があるか否かというところだと思います。大阪はかつては北海道の海藻を見て、出汁にして日本料理をつくったように、付加価値を創造する力がありました。東洋のマンチェスターと言われていた時代には、農業と工業を商業がつなぎ、「大阪独自の産業様式」をつくり上げていく力があつた。さまざまな情報を収集し、融合・編集・変換し、価値を創造していくトランスファーを駆使する力、ビジネスモデルを進化させていく「学び」という文化がなくなってしまうことが、大きく地盤沈下した要因のひとつではないでしょうか。

松岡 地域文化が失われたいのは、何かクラブ財的なもの、あるいはサロン文化的なものがあり、それが各家々に伝えられ、またそのクラブやサロ

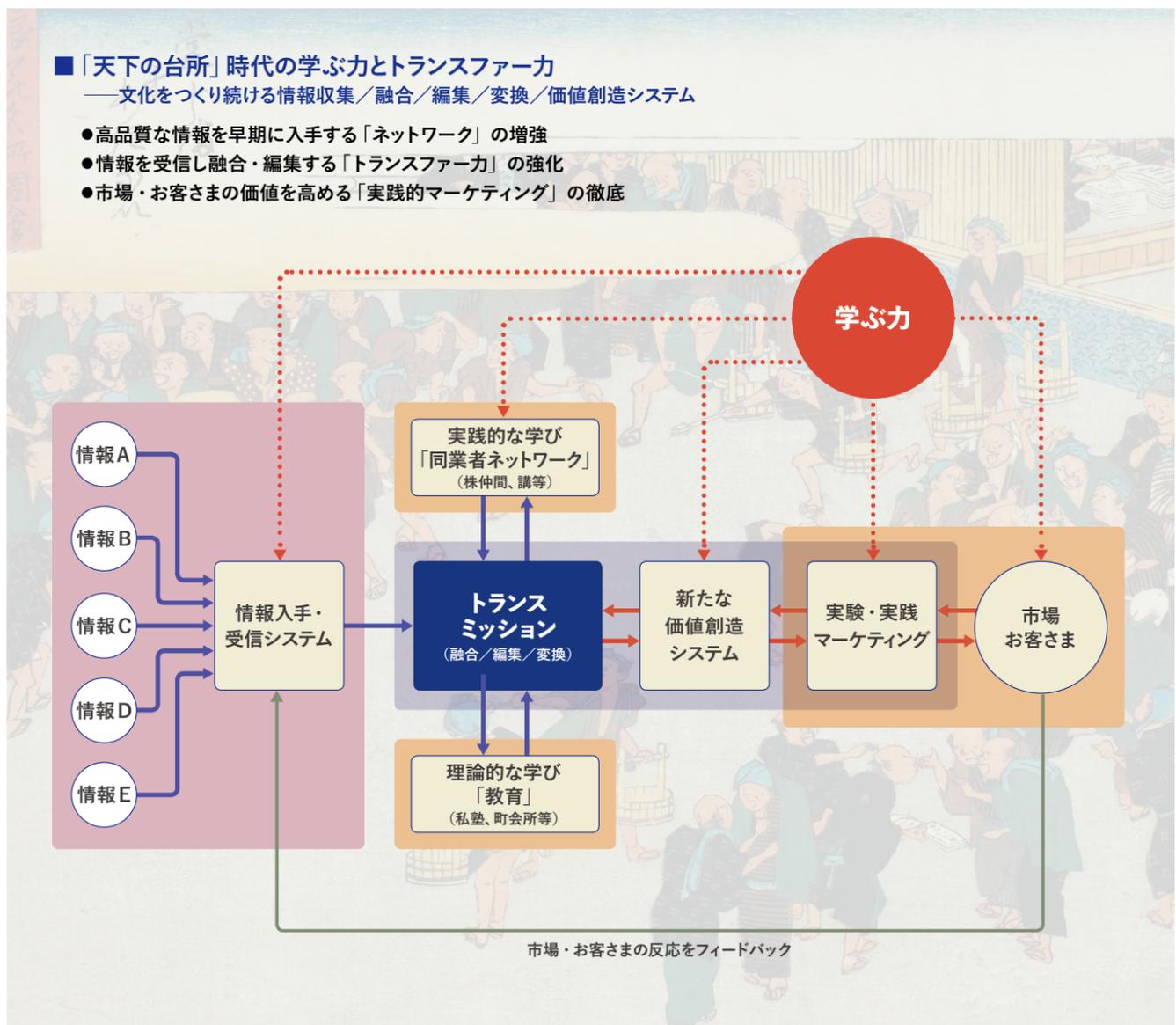
ンの集いを楽しみにしていくというような流れがあるからなのです。日本ではたとえば祭りのように、そうした以前の「型」が再生され、それが各々にフィードバックされる。その繰り返しが地域経済文化を保ってきました。

大阪には、それがあつたと思います。秀吉の時代から始まり、堂島の米市場があつたため、全国のものを経済的にモニタリングできるセンターにもなつた。かつ木村兼葎堂のようなクラブやサロンのなもの、適塾や懐徳堂のような私塾が生まれ、そこに素封家の鴻池善右衛門たちも私財を提供した。地域文化のエンパワメントをパトローネージュする人たちがいた。彼らはCSR(企業の社会的責任)でやっているというよりも、本当にそういうものがおもしろかったんだろうと思います。それは松下幸之助や佐治敬三や鳥井信治郎もそうだったし、場所は違うけれども、大阪を挟んだ伏見から灘までの酒造メーカーもその動きに連動している。

逆に言えば、クラブやサロンや人、それらのフィードバックをするシステムといったものがひとつずつ外れていってしまったことが、地域文化が解体していった理由だろうとも思います。もう一度、つなぎ目をつくり直していかなければいけないですね。

池永さんがおっしゃつた出汁にあたるような最初の基礎、基盤となるベーシックな大阪をつくり直すことも重要です。出汁は、お吸い物に使うだけではなくて、煮たり、かけたり、あらゆるものに使う。だから、そういった基層で分断が起きてしまうと、大阪自体が割れてしまうだろうと思います。

ヨーロッパはEUや難民の問題を抱えながら



■「天下の台所」時代の学ぶ力とトランスファー力 —文化をつくり続ける情報収集/融合/編集/変換/価値創造システム

- 高品質な情報を早期に入手する「ネットワーク」の増強
- 情報を受信し融合・編集する「トランスファー力」の強化
- 市場・お客さまの価値を高める「実践的マーケティング」の徹底



松岡氏が所長を務める編集工学研究所内。書物と調度品が美しく調和した知の空間。

100%変わるのではなく、過去から95%ほど大切なことを伝承し、新たなことを5%取り込み、進化・洗練させ、繰り返しながら価値を創造していくことが、本来のイノベーションではないかと思えます。先ほどの文化論と同じく、そもそもの原点・本質が失われたことが大きい。大阪には変えてはいけない大切なことがあったはずなのに、変えてしまっただけでなく、それが何かというのを忘れてしまった。

松岡 大阪は目立つことをしようとすすぎたんだでしょうね。変えてはいけないことを大事にしないで、目立ったらええわということで、見た目に走ったんでしょう。「文化」というのはわかりやすく言えば、基層と

中層と表層があって、基層にアーキタイプという原型、母型があり、中層にプロトタイプ、類型があり、一番上の表層、表によく見るところに典型、ステレオタイプがあります。大阪はこの表層のステレオタイプにイノベーションを感じすぎたというか、間違っただけでなく、使うのであれば、下のプロトタイプの改革がなければいけなかったんです。

プロトタイプとは、椅子やピアノ、あるいは食物というようなもので、この概念がないとそれが何か呼べないというものです。椅子という概念がないと、椅子をつくってみるとなるときにプロトタイプはつくれない。ステレオタイプで目立つことをやって、それがプロトタイプを生んでいる

と考えられるならそれでもよかったです。ところが大阪はその新たなプロトタイプ、現代社会の新たな類型をつくれなかった。さらに言うところにはアジア、あるいは人間や環境ということまで下りられなかったのですね。

「〜とちやうの？」の学ぶスタイルと「ええんちやう」の無責任性

池永 それから言葉の問題があります。「〜とちやうの？」という言葉が、実は大阪の本質を表しているように思えます。いろいろな人との交わりのなかで「なるほどなあ」「そうなんか」「せやなあ（そうだなあ）」というふうな会話をしてい

返していくことが文化の本質で、それぞれのステップを最適化し、それぞれのステップをつないでいかなければならないのに、それを忘れてしまったことが、大阪が大阪でなくなった要因ではないかとも捉えられます。

松岡 耕す、耕作されたものとしての文化というのは、種と土壌と育成が三位一体で連動しています。もし文化が失われたり、弱体化、衰退したりしているという場合は、この三つが分断されたんだと思います。わかりやすく言うと、たとえば種と土壌を切り離し、種は種、土は土で売ってしま

う。あるいは土の改良は時間がかかるので、もうしないとか、業者化してしまう。そうすると生活と結びつかなくなります。

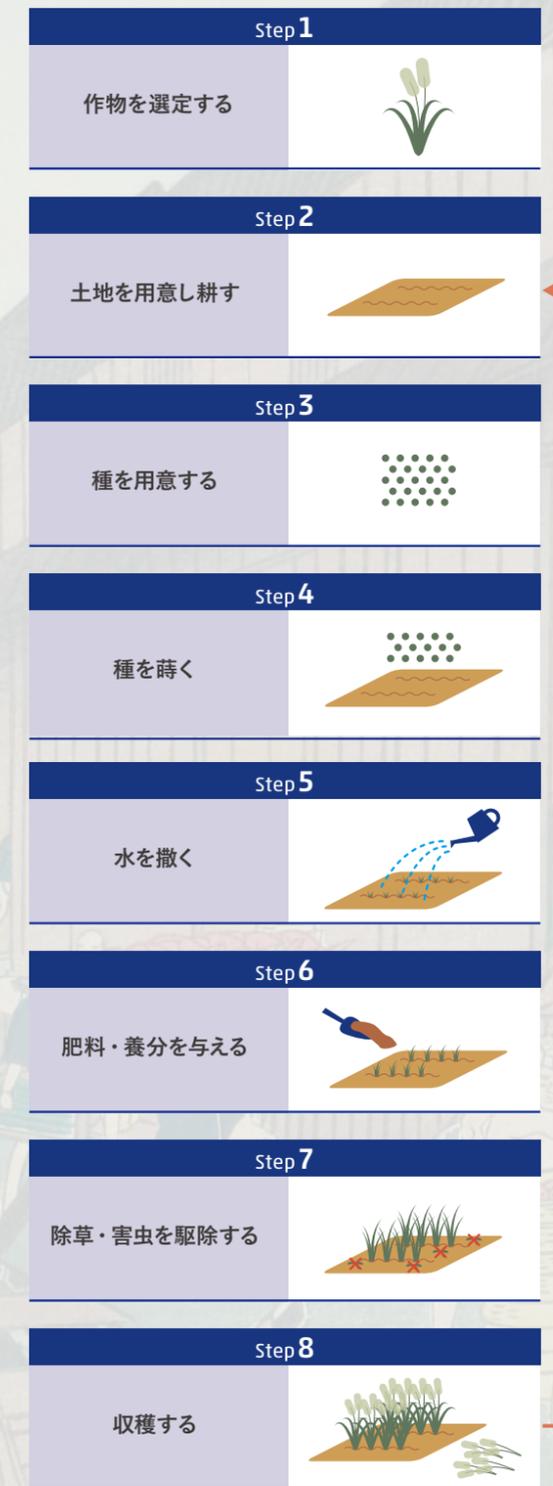
たとえば樂焼は、利休という偉大なディレクターが、長次郎の焼き物を広めたのではなく、それにあうサイズで茶室という不思議なものをつくり上げた。利休の前に活躍した武野燭燭も堺の人でしたが、堺に育ったディベロップメントな気質のある人たちが、既存にあった文化と、焼き物という技術を単に合わせるだけでなく、茶室というクラブ・サロンの空間を生み出した。した

がって、もし文化が廃れたり分断されたりしているとすると、先ほど言った種と土壌と人を見ているディレクターやプロデューサーの存在、利休や紹鷗にあたる目利きが必要だということになります。

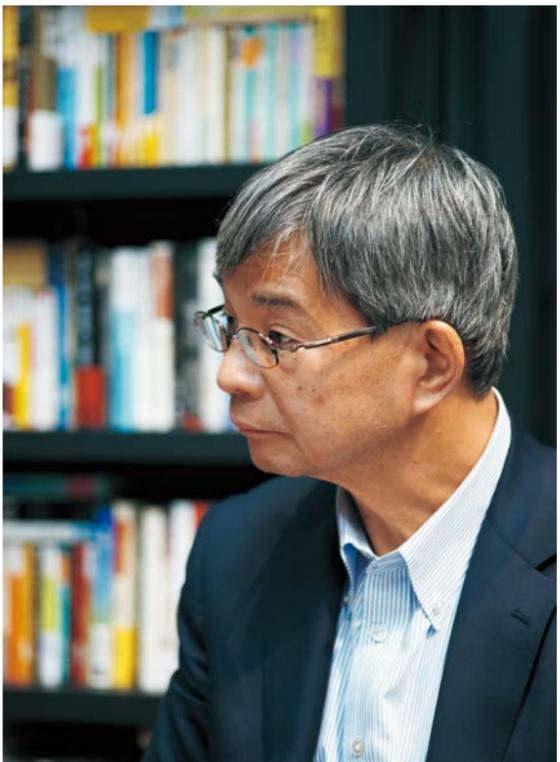
池永 「イノベーション」という言葉が流行っています。ビジネスの現場でも、何でもかんでも「イノベーション」で、言葉がひとり歩きしています。ともすれば、違うこと、別のことを追い求め、変えることが意味あると走りつづけ、ものごとの本質を見失ってしまっている。突然

■文化をつくり、繰り返す方法

「文化」(culture)の語源はラテン語の「耕す」(colere)。文化とは「耕し、種を蒔き、水・養分を与え、収穫し、種を取り、また蒔くの繰り返し」である。



「よい種(本質)」を選び、もう一度蒔く



て、相手から実は学んでいて、自分の考えをまとめて、「〜とちゃうの?」という言い方になる。自分の考えを他人に話しているうちに、考えを再確認して、編集しているんですね。東京人が「〜だよな?」と言うところを、大阪は「〜とちゃうの?」と言う。この差は実は大きいと思っています。「〜だよな?」という東京の言い方は、他人と同じということが大切という意図が入っていますが、「〜とちゃうの?」という大阪の言い方は自分の考え方を確認しつつ、信念に変えていこうとする意図がある。そして、間違っていたら、すっと変わる。頑固なほど変わらないように見え、納得すると変わるといいう、人から学ぶ姿勢・マインドを、大阪で仕事をしたり、話をすると感じます。学ばなくなった大阪と言われますが、この「〜とちゃうの?」という言葉に、まだ可能性はあると考えています。

松岡 それはおもしろいですね。私は、大阪の文化や大阪のよさはアナロジー、類推や連想力があることだと思います。これは編集文化にとつて一番大事なものです。それを掴むために「〜とちゃうの?」を絶妙に使って、「こっちなかな?」「あっちなかな?」とうまく比較し、自分の連想力のなかに取り込んでいく。

そう言えば、大阪は「えらいこっちゃ」って言いますよね。この「えらい」というのを両義的に使っているのは素晴らしいと思います。「これは大変やで、もうあかんわ」と、「これはえらい(凄い)」ことですなあ」と、両方使う。「かなわんわ」と「さすがやわ」という両義的なことを判断するのもおもしろい。

の力が薄れているんですね。大阪はまだ連想の世界が残っているし、漠然とした領域に濃いものがあるので、そこを活かした方がいいと思います。アナロジカルシンキングのいいところは、二者択一ではなく、二項同体や多項同体ができること。いくつものオプションを「かまへんで全部やりまひよか」「せやけどとりあえずでっせ」というような、結論を先送りできる力を持っている。結論を急ぐようになったから、駄目なんですわね。

池永 そうですね。まさにそこが大きいです。一方、「ええんちやう」という言葉がここ数十年使われはじめたことが気になってます。一見、ものわかりがいいように映りますが、逆に無責任・放置観・諦めが、この言葉に表れているのではないかと思います。

松岡 「ええんちやう」は、要するに「いいかげん」。これを「いい加減」にした方がいい。**池永** 「ええんちやう」が通用するなら、目利きには必要ありませんね。かつて商いのまちと言われた大阪に、本質を見抜く目利きがいなくなりつつあると思います。

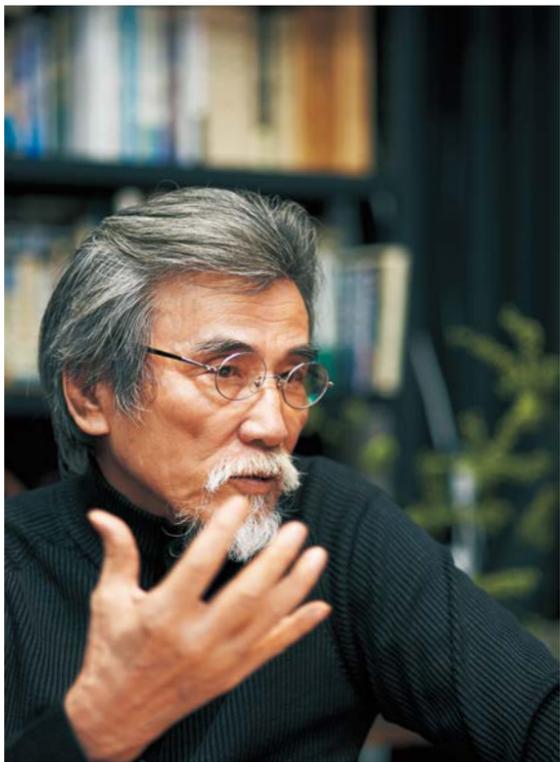
松岡 目利きは、用意と卒意の両方の目が利く。用意とは、準備されたものを「こっちはいいです」ときちんと選べるということ。卒意とは、その場の空気をつくること。俳諧や漫才、お笑いといった文化そのものではなく、見ている側の目に用意と卒意の両方がなくなり、その場でやっている即興力だけを見ているから、目利きが育たない。駄目と言わなければいけないものがあるにも拘わ

らず、できていない。ということとは、用意についての歴史観や価値観が堆積しなくなっているわけですね。たとえば桂米朝に代わるものを話すときに、米朝以前と米朝を、用意と卒意の両方で完璧にじゃなくても説明できなければいけないのできていない。そこが問題です。

ミニマルポッシブル×人情 || 上方スタイル

池永 2016年にサウジアラビアの副皇太子が来日され、天皇陛下と皇居・御所で会見したときの写真があります。白とベージュを基調とした部屋で、おふたりの背に障子があり、外の光が差し込んでいるのですが、この写真が世界に発信されたときに、「ミニマリズム」という言葉で絶賛されました。おそらく10年前でしたら、アラビアの世界では評価されなかったと思いますが、モノの本質を引き出していくところが、まさに今のインバウンドで海外から評価されている本質ではないかと考えています。南禅寺の庭に見入っていたり、琵琶湖の波の音をただひたすら聴いていたりする外国人がいらっしやいます。問題は、日本の文化の粋であるミニマリズムが日本のどこにあるのかという議論がなされていないところにあります。

大阪は怖いところと言われ、とてもイメージが悪いのですが、その怖い大阪に外国人がどんどん来られている。実は大阪市中央区は「訪れるべき地域世界ランキング」で1位になり、ニュー



ヨーク・タイムズ紙でも、「2017年行くべき世界の場所52」に大阪と琉球列島が選ばれ、マスターカードでも「急成長渡航先ランキング」で2年連続で1位になっています。

松岡 大阪人がそう思えずに、日本人もそう思っていないのに、なぜ外国人が大阪のおもしろいところを発見しているのか? それミニマリズム?

池永 ミニマリズムと、独特なローカリズムや奈良・京都の歴史も包含した文化性があるところですね。さらに寛容的で心地よいところだと。

松岡 ミニマリズムは、ミニマルポッシブルというふう言い換えていいと思います。つまり引き算によって、ポシビリティ、ポテンシャルが上がるのが大事で、茶室も、数寄屋造りも、枯山水も、何かを取っ払うことによって多様性が入って

も問題ないとなる。たとえば茶室は、何もなくて、誰が入ってもいいというものできたわけですからね。単なるミニマリズムだけでは、ミニマルアートみたいになったり、あるいは全部ガラスでつくってしまうとか、スッキリしたものがいいというふうになってしまうので、警戒した方がいいでしょうね。

それから、やっぱり人情味というふうなものに、再帰したらどうかと思います。西鶴や近松以来形成されてきたもの、蕪村が残したもの、あるいは私塾が発達できたように、人情味というか、柔らかいところが必要だろうと思います。

フィギュアやサブカルチャー、フォークソング、歌謡曲、食べ物といったものを全部並べて、どこにミニマルポッシブルがあり、どこに人情味があるのか、回答を与えてみるというのではないのでしょうか。さらに、ミニマルポッシブルと人情を掛け算すると、上方スタイルが浮上してくると思います。何が上方スタイルになってきたのか、吉本から新喜劇まで、串カツからたこ焼きまで、出汁から昆布まで、そこに潜んでいるものは何かを列挙しないと、本質のところはわからないかなという気がします。

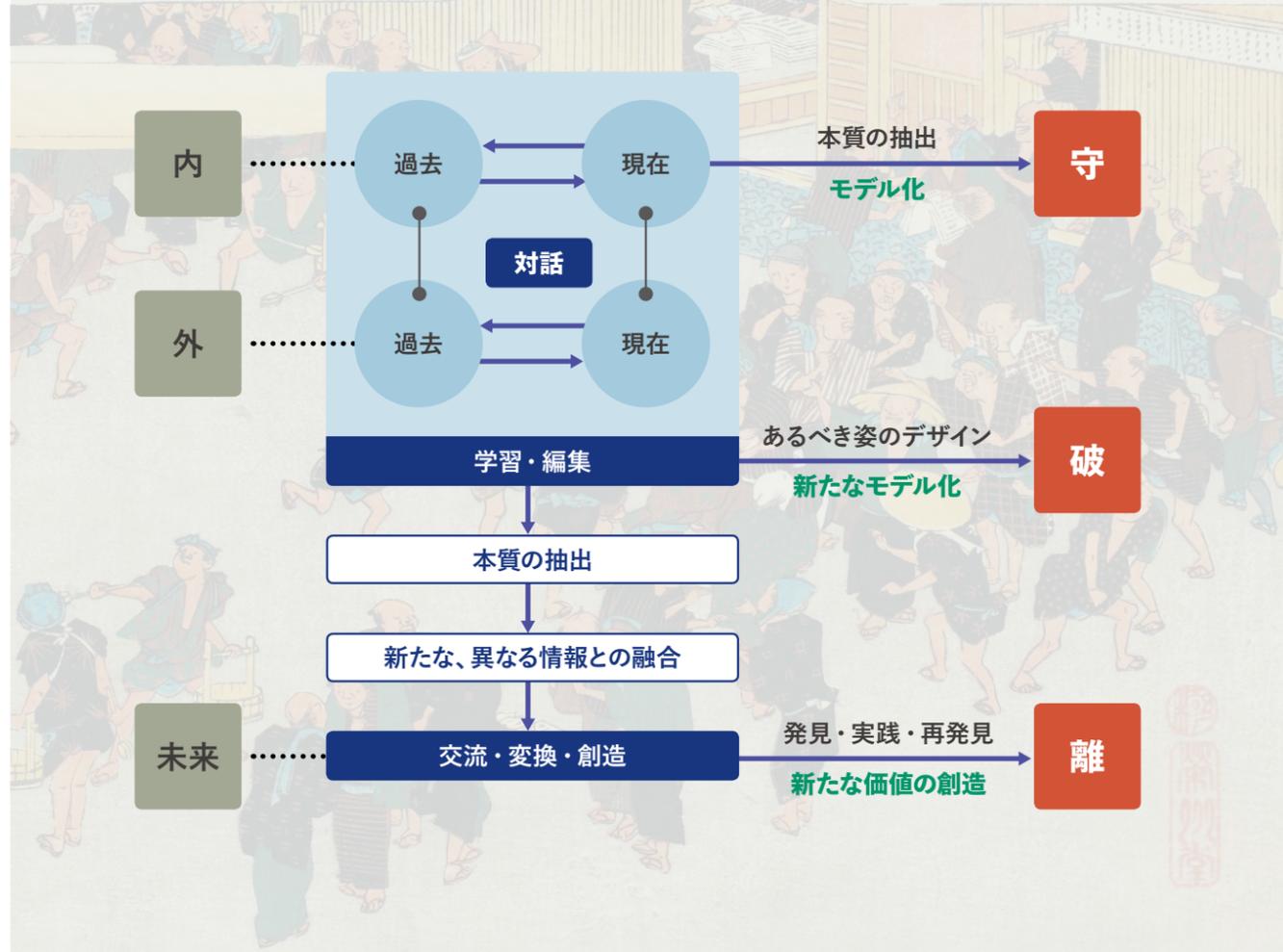
都市の再起動に 必要なものは

池永 最後になりますが、これからの大阪、近畿に向けて「ルネッセ」として何をすべきかをご教示いただけたらと思います。

松岡 ルネッセが再起動のエンジンと

■ルネッセ（再起動）の方法論

「内×外」×「過去×現在」を掛け合わせて融合し、そこから「本質」を掘り起こし、新たな、異なる情報を組み合わせて、都市・地域・企業の再起動をはかる。



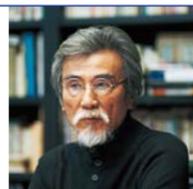
「ミニマルポッシブル×人情=上方スタイル」を体現する空間。静謐（せいひつ）さと雑多な人情味の共存が、都市の魅力だ。
 上/上方発展の礎を築いた豊臣秀吉建立の大阪城（写真提供/ PIXTA）。
 中/堺の目利き・千利休の菩提寺である大徳寺聚光院（じゅこういん）の茶室「閑隠席」（撮影/宮村政徳）。
 下/近年、外国人観光客で賑わう黒門市場（写真提供/ PIXTA）。

なっていくには、一つはバックミラーに映る過去を、ピピッドに見せながら前進する方針をつくらないと駄目だろうと思います。そのバックミラーは小さいものでもいいから、いくつも持っていた方がいいですね。大きなバックミラーにせず、いろいろなものが映り込んでくるようにする。出汁や料理が映るところがあれば、大阪弁が映るところもある。大阪独特の映り方の違うバックミラーになると思います。

が、大阪は連想や類推、比喩の能力、「えらいこっちゃ」のような多重性のある言葉を持っていますから、二者択一的ではなく「よい」と「悪い」の両方を持つような表現力を外に発信した方がいいと思います。たとえば柔道で、効果や有効を、国際ルールで決めていきますよね。それで日本は1本勝ちに走らざるをえない状況になっている。私の見方では、1本勝ちにこだわるのは、サムライの精神としてはいいけれども、評価能力、目利きの力を失うということになります。ですか

ら、審判に効果や有効の見方をもっと教えるぐらいになった方がいい。
 三つ目は、パトリ。パトリオティズム、郷土愛ですね。ナショナリズムではなくパトリとしての大阪、郷土としての大阪を持つてほしい。その郷土にこそ、世界が入っている。世界中が大阪にある、そういう郷土愛を大阪人は持ちたいんだと宣言すべきです。アリゾナも瀋陽も上海も、東北も福岡も沖縄もみんな入る。そういう郷土愛を大阪が持つんだとなれば、アメリカに匹敵するもの

が生まれると思います。アメリカは全部をサラダボウルのなかに入れてあるわけですから。大阪はもっと屈託なく、大きなパトリを持って、小さいバックミラーをいっぱい持ってやればいい。そして「ルネッセ」は、その再起動すべきルネッサンスのエンジンに装着するシリンダーの役目を担っていたいただきたいですね。
 池永 肝に銘じます。3回にわたる先生との対談でお話しさせていただき、学ばせていただきながら「上方生活文化堂」（42頁）や、ルネッセセミナーなど多方面で始動していますので、ぜひ今後でもご指導いただければと思います。長期にわたる対談、本当にありがとうございました。



松岡正剛
まつおか・せいこう
 佛編集工学研究所所長、イシス編集学校校長。1944年、京都府生まれ。71年佛工作舎設立、総合雑誌『遊』を創刊。87年編集工学研究所を設立。以降、情報文化と日本文化を重ねる研究開発プロジェクトに従事。2000年インターネット上にイシス編集学校を開校し、ブックナビゲーション「千夜千冊」連載を開始。『知の編集工学』『知の編集術』『多読術』『日本という方法』『松岡正剛千夜千冊』(全7巻)『擬MODOKU』など著書多数。



池永寛明
いけなが・ひろあき
 大阪ガス(株)エネルギー文化研究所所長。1959年、大阪市生まれ。82年大阪ガス入社後、天然ガス転換部にて人事勤務、営業部門にてマーケティングに携わる。日本ガス協会にて企画部長として、エネルギー・環境制度設計対応を担務。大阪ガス株式会社、北東部エネルギー営業部長、近畿圏部長を経て2016年より現職。